

「ソ連」における現代日本文学研究

キム・レーホ

(ロシア科学アカデミー世界文学研究所)

近代日本の像というのが、今回の集会のメインテーマと言われておりますが、この問題は非常に複雑な、難しい問題だと思っております。私は、もっと問題を縮めて、では現代の日本文学の像というものはどういうものであるか、現代文学の型とは何かということについて、ちょっと話をしてみたいと思います。

1968年に川端康成が日本で初めてノーベル賞を受賞しましたが、そのときのノーベル委員会の言葉では、川端康成の文学が、日本人の美意識と日本人の考え方を最も広く、典型的に表現しているので、この賞を授与する。そういうことでありましたが、ここに来る前に、私は京都の西川長世教授の『戦後日本文学論』という本を読みました。それは、西川教授がトロント大学で講義をした、その講義をもとにして出した本であります。西川教授は、このような考え方に全面的に反対をしております。

そうすると、現代日本文学を代表するのは、近代文学派であるか、戦後派の文学であるか、それにも疑問を持っている。というのは日本の一部の批評家たち、特に江藤淳は、近代日本文学は何かということの問題を設置して、それは西洋の価値を下敷にした文学であるために、無価値の文学であり空虚の文学であったと、そう主張しております。そうすると、19世紀末から20世紀の近代文学とは何かという、そういう問題の提起さえすることが出来ないようになっております。またここに来る前に、

私は村上春樹の『ノルウェーの森』を読みましたが、それは1987年に日本で最も読まれたベストセラーとなっている。その作家の分身と見られる主人公は、こうっております。「私は、平凡な日本の学生であり、平凡な日本の家庭で生まれ、平凡な日本の顔をしている。」そうすると、彼は平均的な日本人であるわけです。だが、その小説を読んで、これが日本の平均的な日本人であるだろうかと、疑問を感じざるを得ません。だから、こういういろいろな型の日本人、いろいろな型の日本文学、私は文学について話をしておりますが、いろんな潮流の文学を統合する、統合のポイントはどこにあるか、甚だ難しい問題だと思います。

それに答える準備は、私にはないので、ではソ連人はいま日本の文学をどのように理解していて、どのように読んでいるか、ソ連の日本学者たちはどういう態度でどういう方法で、日本の文学の研究をしているか、そういうことについて話をします。戦前のソ連での日本認識は、確かに政治と軍事の領域に限られていました。それは、周知のように、時代の歴史的な制限があったのです。1913年に徳富蘆花の『不如帰』が翻訳されて読まれましたが、それはエキゾチックな文学として読まれただけです。30年代にプロレタリア文学とそのほかの若干の作品が翻訳されましたが、日本の研究は、限られた、少ない数の人たちの関心事でありました。日本研究において画期的な時期は、60年代に入ってからです。それはもちろん日本経済の高度成長とも関連しておりますが、この時代にソ連の学会では、ヨーロッパ中心主義を徹底的に排斥しました。そうして、日本を世界から孤立させて研究するのではなくて、日本文化の特殊性を考慮に入れながら、日本文化の普遍性、世界性を研究しようという態度が高まりました。だから、日本人とは何か、日本文化とは何かということが、ソ連における日本研究の中心的な課題ではないかと、私は思って

おります。

私は、ソ連では日本の作品がどのように読まれているかということを行いました。簡単にソ連の全ソ書籍館の統計を、ここでちょっと話をします。この統計は、私が直接そこに行ってもらった統計でありますので、正確だと思います。1987年1月までにソ連で発行された日本文学作品は448巻に及んでいます。ロシア語以外にも25の各民族語に訳されています。戦後、1946年から87年までの統計を見ますと、それは381巻出版されていて、その部数は2,165万5,000となっております。私の関心事は、最近の20年間の統計はどうなっているのかと見ると、1967年から77年の10年間には263巻発行されていて、その部数は1,618万4,000になっています。最後の1977年から87年の10年間には444巻発行されて、発行部数は908万7,000となっております。以上からわかりますとおり、日本の文学が盛んに翻訳されて読まれたのは、60年代から80年代にかけてであります。

ソ連では、外国の作家の作品は、普通5万部から10万部でしておりますが、日本の作品が翻訳されて店に出ると、数日を待たず売り切れてしまいます。日本の文化に関する関心が広まったという証拠の一つとして、日本文化や日本文学について書く人は、日本の研究者に限らないということです。一般の文学者が書いているその一つの例は、1961年にモスクワの有名な『外国文学』という雑誌に載った著名な女流作家ヴェーラ・インヴェルの文章です。彼女は、芭蕉詩集を読んで、心打たれて文章を書きました。その文章がここに発表されましたが、この文章を読むと、世界文学には、こういう別れのつらさをこのような高い芸術度で表現している文章は稀です。日本の俳句、短歌を読んだ後では、西洋の長編叙事詩なんかは、言葉の無駄遣いが多いのではないかという、自己反省み

たいなことを書いておりました。

そして、一部には、日本の短歌とか俳句が、何かエキゾチックな日本人だけにつくられるそういう文化であって、外国人、特に西洋人には無関係な、そういう文学ではないかという考えを持っていた人たちがいますが、今はそういう態度が変わってきていると思います。この文芸評論家たちの日本の俳句に対する評論を読みますと、それは、日本の俳句は世界文学における傑作であって、根本は同じではないか。西洋のポエム、特に長編叙事詩なんかを読むと、西洋の作家たちは、世界を無限に広げて、そして人生を探究する。日本の短歌は、宇宙を最小限度に縮めて、そして人生を観照する。だから、根本は同じものではないかという、こういう考え方は、60年代に入ってからだと私は思っております。

私は、モスクワの文学大学で、日本現代文学という特殊講義をしておりますが、学生たちにどういふ日本の作品があなたたちは好きであるかと聞いてみますと、大部分の学生たちが、短歌・俳句だと答えます。私は、初めは驚きましたが、よく考えてみると、そのとおりではないかと思いました。この87年にベストセラーになった、俵万智の『サラダ記念日』を読みましたが、その詩集の表紙に『サラダ記念日』と、日本語とローマ字で書いてあります。短歌が国際化されていることの一つの表現ではないかと私は思いました。

ソ連人がどのように日本の文学作品を読んでいるかということは、まだまだ長く話をすることが出来ますが、時間の関係で、私はソ連の日本研究者達の態度、研究方法について、若干話をしたいと思っております。すでに言いましたが、ヨーロッパ中心主義は世界文学を研究するのににおいて、適当な方法ではないということが、完全に自覚されております。だから、日本の文学を世界文学の一環として、その関連性のもとに把握

するということ。だから、類型学的な研究方法、それに関心を集めております。

ソ連における日本文化、日本文学認識において、画期的な仕事は、それはコンラッド博士の仕事でありました。彼は、やはり類型学的な比較文学の方法で、日本の自然主義、日本の浪漫主義、特に日本におけるルネッサンスの研究をしております。彼は、60年代の初めに書いた『リアリズムの諸問題と東洋文学』において、日本の自然主義を世界文学に関連して研究しているし、島崎藤村の文学を世界の卓越したリアリズム作家の系列に入れております。そして、浪漫主義の問題であります、ソ連の現行の文学百科事典の第6巻には、浪漫主義の項が入っておりますが、そこには確かに、浪漫主義は西洋、ロシア、アメリカを含めてのそういう文学の現象であって、東洋文学、日本文学にはそういうものはなかったように書いておりますが、最近の研究においては、典型的な研究において、日本の浪漫主義は、日本文学の歴史において重要な一段階であったということは、認識されております。

だが、複雑な問題は、日本のルネッサンスの問題であります。これは、世界文学研究所でいま出している全9巻からなる世界文学の問題、世界文学史であります、9巻に世界文学を縮めて記述するのでありますので、方法論の問題がとてもやかましく提起されました。おのおのの国の文学には、特徴がある。だが、何かそれを総合的にまとめる普遍的なもの、だから類型学的な研究というものがが必要です。コンラッド博士は「ルネッサンスというのは、30年40年前までは、これは西洋文学に限る、そういう文学観がありましたが、それは間違いであった」と述べています。西洋の前に、特に中国の唐の時代、7世紀8世紀の杜甫とか李白とか、ハニニウイの文学には、立派にこういうルネッサンス的な人間の考

え方がある。日本の元禄文学においては、中国のそういう文学の鏡の反射だ。そういうことで、でもそれは東洋文学には限らない。ペルシャの文学、アルメニアの文学、そしてイクルジアの文学、そして14世紀に徐々に西洋に移っているんだ。こんな広大な世界文学の考え方、構成図を、彼は主張しましたが、彼の理論には反対論者がたくさん出ました。中国の7世紀の文学を、ルネッサンス文学の範ちゅうに入れて研究するのが、それが正しいのかということ。だが、私がいま言いたいのは、それが正しいか正しくないかという文学史的な問題よりも、日本の文化、東洋の文化を、世界文化の一環として研究しようとするこのソ連の学者達の態度、それを私はここで強調したいと思っておるのです。

福本一男氏が書いた『日本ルネッサンス史論』を、私は読みましたが、もちろんこの福本一男氏のルネッサンス論とコンラッド博士の世界ルネッサンス論とは、相違があります。だが、時間がないのでそんなことは私は言いませんが、最近、1982年にソ連で発行された本の中で、ルネッサンス文学の有名な研究者ヴォッセヴォ博士は、コンラッドのこの東洋ルネッサンスの論に賛成だというよりも、これは理論として立派な理論であるということを、序論で書いておりました。

この近代日本の精神像・文学像ということでありますが、ソ連の文学者・研究者たちの間には、一定の傾向があると思っております。どういう傾向か。去年の11月に東京で日ソ文学シンポジウム、川端シンポジウムがありましたが、そのシンポジウムで私が考えたのは、ソ連の文学者たちの川端文学、現代日本文学の研究において日本の特殊性、それを主張するあまり、日本の現代文学のいわゆる現代性を過小評価しているのではないか。そういうことを私は、シンポジウムに参加してつくづく感じましたが、日本の学者たちは、川端康成の文学の特殊性を主張しなが

ら、川端文学がどんなに現代文学とつながっているかということを主張していることは、私は今も記憶しております。

なぜ、ソ連の研究者たちは、川端文学とか谷崎潤一郎の文学とか、いわゆる日本の特殊性や特徴がよく出ているそういう文学にまず注意を払っているか、注意を向けているかということを考えながら、私は一つの面白い才能に出会いました。今世紀の初めに、アメリカのロシア文学研究者で翻訳もしている、トーマス・セルチュルという人が、プーシキンからクプリンまで、19世紀から20世紀初頭までのロシア短編集を出しました。その短編集の後書きに、彼はこう書いています。「プーシキンの『スペードのクィーン』、それを読んで私は面白いと思った。だが、これはロシアの作品かと私は疑問に思った。ロシアの作品よりも、こういう作品をプーシキンの名前でなくて、仮にジョン・ブラウンの名前でアメリカの雑誌に発表すると、アメリカ人はこれはアメリカの作品だと思ってしまうでしょう。だが、ゴーゴリの作品は違う。ゴーゴリは完全にロシアの作家である。『外套』、これはロシアの作品である。」

この今世紀の初めに書かれたアメリカ人のこの文章は、いまソ連人が日本文学をどんなに理解しているかということに、深く関連しているのではないかと思います。仮に、野間宏とか阿部公房の作品が翻訳されて読まれると、これはフランスの文学書としてでも、あるいはアメリカの作家たちの作品としても読める。これは日本の文学というよりも、何かほかの文学ではないか。むしろ川端康成とか谷崎潤一郎の文学は日本文学だ、こういう考え方には、私は全体的には反対をしておりますが、ゴーゴリ自身は、プーシキンを外国の作家とは見ない。プーシキンを自分の師と見ておるし、プーシキンを近代ロシア文学の創始者と見ておる。だから、私は、こういう考え方は、まだ日本文学に対しての認識が浅い

ところから来るのではないかと、思っています。

ソ連における日本文学の研究で、大きな領域を占めているのは、もちろん比較文学の領域であります。ロシアと日本の近代化の問題、これほど面白い問題は、私はないのではないかと考えております。仮に、ロシアスラブ派と日本主義者たちの西洋文化受容の態度、こういうことを調べてみることは、今日の文化を考えるにおいても、とても興味のある材料だと思っております。

私は、時間がないので簡単に言っておりますが、それと関連してもう一つ、トルストイと日本文化、トルストイと東洋文化、そのつながりは深いものである。今まではトルストイのリアリズム小説と日本の小説、そういうことが主でありましたが、トルストイの宗教と仏教の関係は、どういうものであったか。なぜ、トルストイは人生の道徳を考えるにおいて、仏教・道教にそんなに注意を払ったか。宗教の問題、こういう問題の提起も、いまソ連の日本文学者の間で論議されております。

最後に言いたいのは、21世紀の扉の前に立っている日本文化とは何かということを考えずにはおられません。19世紀末から20世紀にかけて、日本が体験したその体験は、東洋世界的に貴重な体験だと思っております。その日本の21世紀のあり方、日本の文化のあり方、それは非常に興味のある問題であって、国際日本文化研究センターのこの問題の解決の役割に期待をかけています。

(1989年 3月)